

# 共立女子大学文芸学部報

## 私と共立と図書館と

下村陽子

文芸教養コースを卒業後、文芸界的に話題を呼んだ図書について、それが世に出て議論を呼びながら世界的に広く受け入れられていくにつれて「書評」の内容がどのように変化していったのか、また、その図書の評価が高まってきたこと、その「書評」がそのどのような影響を与えたのか、といったこと執筆依頼があった。助手時代に長く学部報を担当して、学部報に関する依頼は断つてはいけないと思っていたためお引き受けした。先生が挙げられたのは、農業など化学物質の使用による環境破壊の危険性について警告を發したレイチェル・カーソンの『沈黙の春』。その時、頭に閃いたのが、修論の指導教授であったN先生がある時ふと口にしたことだった。世

の索引で、米国には長い歴史を持つ書評索引がある。それが『沈黙の春』の書評を調べてみようと思いつきかけになった。そのようにして何とか書いた記事を日先生が授業で使ってくださったと伺い、大変恐縮に思った覚えがある。

**知識の森**

助手(当時は副手)にならないかとお話があったのは、半数近くがけない図書との出会いが生まれ、自分の興味・関心や知識に新たな視点や広がりをもたらす効果があるといわれている。

知識に広がりを持たせられるかどうかは個人の資質の問題で、その意味では大した収穫は得られず



「Action - 衝動 -」 木彫(樟・着色) 筆者作 2014年

## 美の旅

渡部直

「対立するものを対立したまま両立させることが『術』である。」

ある武道家の言葉が印象深く残っている。

「安定と変動」

「瞬間と無窮」

それは「芸術」の中にも内包される営みであるといふことを改めて確かめる。(専任講師・造形芸術)

共立女子大学文芸学部報 第127号  
発行日 2017年9月29日  
編集・発行 共立女子大学 文芸学部  
〒101-8347 東京都千代田区一ツ橋2-2-1  
発行責任者 池上公平

学部報に関するご意見・感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。  
gakubuh@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みになれます。  
http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/

第127号 主目次

第1面	トップエッセイ 美の旅 大学随想
第2面	特集「ここが違う、文芸学部!」 卒業生コラム
第3面	研究ノート 心象点描
第4面	各セクションから

(今号の一言)  
「体感を鍛えるように、日々の勉学の空間の中で鋭敏な感覚が鍛えられ続けている」(山下敦)

## 大学随想

この学部報が出る頃は卒業論文追い込みの季節。実践真つ只中の文芸学部の特徴「よむ・かく・書く」について前回に引き続き考える。

本年度の卒ゼミに互いの原稿を校閲しあうピア・エディティングを導入した。口頭発表では、互いの目に触れるものはハンドアウト程度で、提出前に論文そのものを読む機会はない。提出直前になると教師は毎日、添付ファイルを校閲する。苦勞した原稿に赤字が入るのは学生には耐え難いことらしく、「ダメダシ」の一言で済まされることもしばしば。「ダメダシ」で片づけ、思考停止するのではなく、フィードバックを活かし、卒論という創造のプロセスをより味わい、全うして欲しい。

ロバート・スコールドは『記号論の楽しみ』(1982)で、人文系の学びは「テキスト」の研究であり、「テキスト」の産出が学びのゴールであると述べる。「テキスト」(「テキスト」ではない)とは、簡単に言えば、読まれ、解釈されるもので、文芸学部的には必ずしも文字媒体とは限らない。

作者・批評家だけでなく、教師・学生もテキストに関わり、学生は発表、課題、レポートなどを通して、自分の解釈を「テキスト」として産出する。彼はそれを創造力養成の過程と説き、産業界や経済界を模倣し、学校を「工場」、管理者を「経営者」、学生を「製品」とみなす大学では、学生の創造力養成は脅かされると警告した。

昨年話題になった「校閲ガール」は、校閲が創造の一過程であることがオシャレに伝えた。社会人になれば、文書の作成や、職場で発信する文書の校正・校閲を任せられることが多々ある。他人の目での自分の文章も推敲し、創造する力を養って欲しい。

(杉村使乃・教授・英語英米文学)



グラスゴー芸術大学入口にて

に終わったが、小さな発見はいくつもあった。

あとで考えれば、おそらく英文学コースのY先生が購入されたものだろうなど見当がつくが、書架の片隅で文字通り埃を被っていたウイリアム・ブレイクの大型の詩画集と出会ったり、普通、一般書架ではあまり見掛けることのない小口絵本を見つけたりと、小さな出会いを楽しんでいた。

生涯学習時代と言われて久しい現在、状況は大きく変わった。生涯学習を公共図書館だけに任せるのではなく、大学図書館が積極的にならねばならない。その一翼を担うのは当然だといふ社会的認識が広まり、多くの大学図書館が一般利用者へ門戸を開放するようになってきた。共立でも新しいコンセプトによる図書館が開館し、学生の利用も大幅に増えるとともに図書館に対する評価も上がっていること、概ね新図書館は成功したといえるだろう。

一方で、教員や院生のみならず

学部学生も書庫に自由に入出入りできるといふ大きな利点を手放してしまったこと、失われたものも大きいと言わざるを得ない。「知識の森」である図書館を自由に彷徨って、興味関心の赴くままに社会的記憶の集積に触れる機会を学生は失ったことになる。

**受け継がれてゆくもの**

共立の図書館情報学教育に携わっているが、初期の教育を担当した教員がどのような考えをもって共立における教育の基礎を形作っていたかについて、実は詳しく知らないまま来てしまったことを痛感させられた出来事が昨年あった。

恩師であるT先生に関する問い合わせの手紙をいただいたのであろう。T先生は、米国で学ばれた日本図書館学の第一世代で、文芸学部で司書課程を設置するに当たって赴任された方である。戦後の児童サービスの発展における先生の先駆的な役割を改めて評価し記録

共立の図書館情報学教育に携わっているが、初期の教育を担当した教員がどのような考えをもって共立における教育の基礎を形作っていたかについて、実は詳しく知らないまま来てしまったことを痛感させられた出来事が昨年あった。

恩師であるT先生に関する問い合わせの手紙をいただいたのであろう。T先生は、米国で学ばれた日本図書館学の第一世代で、文芸学部で司書課程を設置するに当たって赴任された方である。戦後の児童サービスの発展における先生の先駆的な役割を改めて評価し記録



# 特集

## ここが違う、文芸学部！

「文芸」という名称を持つ学部は全国でもごくわずかしかなく、よくある「文学部」といったところが異なるのか、おそらく学生にも一般にもよく知られていません。

そのせいもあってか、他と比べて、学生気質であれ、授業であれ、施設であれ、雰囲気であれ、どういう点で違っているのか気付く機会もありません。これはつまり、良い点であれ悪い点であれ、自分自身を相対的かつ適切に位置付けられないということでもあります。その結果、文芸学部の学生の中には、自らのアイデンティティを確認できずに、故なき不安や不満を抱いてしまう人もいるように見受けられます。

そこで、他大学や他学部・短大などの様子、学生のカラーなどをよく知っている方々に、経験をふまえて、「ここが違う、文芸学部！」というところを指摘してもらおう特集を組んでみました。

### アートな空間

山下敦

文芸学部に二十数年間在籍したのち、七年ほど前から他大学の文芸学部で仕事をしているが、名前に「芸」が入っているかどうかは、学部の雰囲気随分と大きな違いをもたらすと感じている。「芸」の文字は、二つの芸術系コースという教育部門があつて、教育カリキュラムに芸術関連科目が多く置かれていること以上に、学部にいる人々の意識を刺激し続けていると思う。ずっと以前、文芸教養コースの

学生に「文芸学部は、文学と芸術が出会う学部と先生方は言うけれど、実際に文学と芸術が混ざり合う授業って、ありません。」と言われたことがある。以来、試行錯誤して両者が立ち混じる授業を心がけてきたのだが、当時はまだ、時代が文芸学部に追いついていないと、文学と芸術は今よりずっと画然と分離していたように思う。その後、日本の社会では、芸術がアートに変わり、アートも何か特別なものではなく日常的な感覚をまとうようになってきた。しかし、それを肌身で感じとれるには、芸術的なものが日々の生活の中に近接していることが必要で、そうでなければ「芸」の部分は毎日の視野に入ってこないものに留まってしまう。

七月のホームカミングデイの折に紹介された展示物に、英文コースの卒業論ポスターがあった。卒業論文に取り上げた文学作品を、一枚のポスターに図案化して見せるという発想は、多分文学部において生まれにくい。文芸コースの読書マラソンには、色彩がきれいで思わず手にしたくなるような小さな五〇冊を読破するというかなり過酷な自主学習に伴走するものが、ノートというの、結構ありえない組み合わせだし、授業から生まれたというフリーペーパー「ARTS」の各号をめぐっていると、この学部が神田の街と呼吸しあっているのが感じられる。

この細部にあつて、この学部はそれを当たり前のように呼吸しているのだと思う。あまりに日常に過ぎず、その空間の稀有さが、ほとんど感じ取れないのかもしれないが、秋に小さな音楽祭がロビーで開かれ、収蔵品や卒業制作の展示が一年を彩り、四年にわたって、毎日少しずつ体幹を鍛えるように、日々の勉学の空間の中で鋭敏な感覚が鍛え続けられている場所なのではないか。

文学部は、基本は文字資料に基づいて研究する場なので、視野も思考も、常に手元の資料の一点に集中していく。対して、文学と芸術(文字と感覚)が当たり前に立ち混じっている文芸学部は、学び手の感性が鍛えられることにその主眼があるように思う。ただ、このような生活のセンスを意味するものとするか否かは、先生方と共立生を含めた、これからの文芸学部の皆さんの決断次第なのだと思う。

### 文芸学部らしく四字熟語で！

谷田貝 雅典

私の研究は、国内外の複数大学を未来システムで結ぶことである。このような研究の関係から、これまで複数の大学の学生の研究指導を行ってきた。その中の、いくつかの他大の学部と共立の文芸学部の学生の特徴の異同を論じてみたい。

廊下ですれ違う前に何学部の学生か、すぐにわかるのが、子ども教育学部。3人ぐらい集まるといつも童謡を合唱している。すれ違う時には必ず「おはようございませ」と笑顔で挨拶してくれ、授業ではオヤジギャグにもよくうけてくれる。幼児・児童教育を担う未来の先生にふさわしい「天真爛漫」「品行方正」な学生たちである。

私の知る限り、最も大学生活を謳歌しているのが人間科学部の学生。文武両道、文理融合、学際領域で学んでいることから、バラエティに富んだ個性が大きな特徴といえる。みな、自己紹介を聞いてみるだけでワクワクさせる魅力を持ち、考え方がとても柔軟で、おそらく世界中のどの社会に放り出しても上手く溶け込める能力をもっている、というより、そのような能力が養成されている。これまでかかわった学生の中から、テレビで活躍する人や国際キャリアウーマンなどが誕生していることからも、「独立独歩」「孔明臥竜」な学生たちである。

さて、文芸学部の学生。廊下ですれ違うと伏し目がちに通り返り、オヤジギャグには笑わない。自己紹介はこちらから促さないと氏名だけで終わってしまい、もし見知らぬ社会に放り出したら、搾

### サロンの空気感

深津 謙一郎

八年前、専任採用の面接で選考委員の先生から、「共立は文学部でなく、文芸学部です。その点どのようにお考えですか」という主旨の質問を受け、とても混乱した覚えがある。当時の私は、文学部と文芸学部の違いなど意識していなかったし、だから当然、文芸

大学院を修了してからはほぼ50年たったいま、毎週3号館の5階にある演劇資料室に足を運んでいる。文芸学部卒業生有志が創立した文芸OGネットワークの一員として、劇芸術研究室所蔵の演劇資料整理を手伝っているからである。ここに

はるか昔に上演された芝居のプログラムをめぐっていると、100円は税金にもついでいかならうかと、想像を膨らませるだけでも楽しくなってくる。さらに、プログラムにはまた別のも楽しみもある。宣伝広告のページを眺めることである。

「稲妻」・「崑崙山」(1951年文学座公演)のプログラム広



「日本の気象」(1953年) プログラム裏表紙

限られたスペースのなかで読者の心を掴む文案作りはコピーライター腕の見せ所である。私のお気に入り、1953年民芸公演「日本の気象」のプログラムに載っている「雨の日は静かな詩を/風の日は激しい情熱を/チョコレートには人生の味、文芸の味、その他色々の味がある/菊池寛。」(大学院演劇学修了)

少々親バカかもしれないが、文芸学部は「百花繚乱」な学び舎である。(教授・文芸メディア)

そのことが、今でも軽いトラウマになっていて、だから共立の文芸学部は余所の文学部とどこが違うのか? 共立の文芸らしさはどこにあるのか? という問題は、じつはちよくちよく頭の隅にのぼってくる。結果、これという結論が出ていくわけではないのだけれども、他大の文学部での授業も経験してみても、共立の文芸らしさでもない(むしろ、それも否定しないけれども)、学部創設以来、我々の先輩方が培ってきた、さつた、ある種の「空気感」のよ

も恐らくは関連する。ところで、世の中世知辛くなつてくると、不要不急と見なされがちな「サロン」がまず切り捨てられる(ものらしい)。というより、我々自身、「サロン」に顔を出す時間がまず失われ、次にその損失にすら気付かない(気付けない)。そうだった時には、専任採用の面接で、私を混乱させた問いは、もはや問われなくなるのだから。もちろん、それは不幸なことである。(教授・日本語日本文学)

このことはまた、厳密な研究論文とは対照的な、毎回の統一テーマを「ウリ」にして、「エッセイスタイル」ならでは、という文章を積極的に歓迎する「文学芸術」という「サロン」が受け継がれてきたことと

も大切にしている。このことはまた、厳密な研究論文とは対照的な、毎回の統一テーマを「ウリ」にして、「エッセイスタイル」ならでは、という文章を積極的に歓迎する「文学芸術」という「サロン」が受け継がれてきたことと

も大切にしている。このことはまた、厳密な研究論文とは対照的な、毎回の統一テーマを「ウリ」にして、「エッセイスタイル」ならでは、という文章を積極的に歓迎する「文学芸術」という「サロン」が受け継がれてきたことと

今昔をさぐりながら

### 演劇プログラムを読む楽しみ

多田 久恵

はるか昔に上演された芝居のプログラムをめぐっていると、100円は税金にもついでいかならうかと、想像を膨らませるだけでも楽しくなってくる。さらに、プログラムにはまた別のも楽しみもある。宣伝広告のページを眺めることである。







